

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：82620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03228

研究課題名(和文) ザグロス地域における農耕・牧畜の起源に関する考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological Study on the Neolithisation in the Zagros Region

研究代表者

安倍 雅史 (ABE, Masashi)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・研究員

研究者番号：50583308

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：カレ・クブ遺跡はイラン東部のビールジャンドから北西140kmにある遺丘である。本研究において試掘調査を行ったところ、この遺跡から1000km以上離れた南メソポタミアのウルク文化の土器群が大量に出土した。

前4千年紀(ウルク期)、南メソポタミアに世界最古の文明が誕生した。しかし、南メソポタミアは巨大な沖積平野であるため、鉱物や貴石などが存在せず、こうした資源を周辺地域から獲得する必要があった。その結果、南メソポタミアの都市国家群は、競って周辺地域に進出し、交易拠点を形成していった。

カレ・クブ遺跡はウルク文化の物質文化が確認された最北東の遺跡であり、最果ての交易拠点であった可能性が高い。

研究成果の学術的意義や社会的意義

南メソポタミアは文明揺籃の地であり、前4千年紀に最古の文明メソポタミア文明が誕生した。なぜ、この地に最古の文明が誕生したのか？現在、主要な要因として、金属や貴石、木材などの資源が不足していたこと、それを補うために長距離交易が発展したことが挙げられている。カレ・クブ遺跡は、南メソポタミアが建設した最果ての交易拠点である可能性が高く、今後発掘が進めば文明形成に関して多くの知見を得られると期待される。

研究成果の概要(英文)：Kale Kub is situated 140km to the northwest of Birjand in eastern Iran. Several trenches were opened and the trenches yielded a number of non-local Urukian pottery such as beveled rim bowls.

The oldest civilization in the world arose in southern Mesopotamia in the 4th millennium BCE (Uruk period). Southern Mesopotamia is a huge alluvial plain and lacks important resources such as metals, woods, and precious stones. Therefore, Urukian city states needed to acquire these resources from neighbouring regions. It is assumed that Urukian culture spread beyond the southern Mesopotamia because the city state in southern Mesopotamia competitively advanced to neighbouring regions in order to get the resources.

Currently Kale Kub is the north easternmost Urukian sites. The distribution range of the Urukian culture was expanded further 600km to the east than previously known by the discovery of Kale Kub.

研究分野：考古学

キーワード：メソポタミア イラン高原 ウルク カレ・クブ 文明形成 農耕の起源 農耕の拡散

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

西アジアの肥沃な三日月地帯は、地中海式農耕の起源地として知られている。1990年代には、肥沃な三日月地帯の中でも、とくに西側のレヴァントで農耕・牧畜が開始されたと考えられていた。

しかし、今世紀に入り遺伝子研究が急速に発達した結果、肥沃な三日月地帯の東翼ザグロスでも独自に農耕・牧畜が誕生した可能性があることがわかってきた。

そして、近年、中央ザグロスのチョガ・ゴラン遺跡で発掘調査が行われた結果、ザグロスでもレヴァントと同様に紀元前1万年ごろにまで農耕の開始がさかのぼることが考古学的に明らかにされ、ザグロスは、現在、地中海式農耕の起源地の一つとして注目されている。

2. 研究の目的

現在、レヴァントで生まれた農耕は、ヨーロッパや北アフリカなど主に西方地域に拡散していき、ザグロスで生まれた農耕は南アジアや中央アジアといった主に東方地域に拡散していったと推測されている。

しかし、レヴァントとは対照的に、ザグロスにおける農耕の起源またザグロスから東方地域への農耕の拡散を対象に行われた研究はきわめて少ない。

そこで、ザグロスにおける農耕の起源およびザグロスから東方地域への農耕の拡散のプロセスを明らかにするため、イランにおいて考古学調査を実施した。

3. 研究の方法

まず、ザグロスにおける農耕の起源を調査するため、2017年度にザグロス南部のホルマンガン遺跡から出土した石器資料と動物骨の分析を行った。

また、ザグロスから東方地域への農耕の拡散を調査するために、2018年度、2019年度に、東イランにおいてカレ・クブ遺跡を発掘した。

4. 研究成果

ここでは、とくにカレ・クブ遺跡の発掘調査の成果を中心に報告する。カレ・クブ遺跡は、現在のイラン東部、南ホラーサーン州の州都ビールジャンドから北西に140kmにあるアイ・アスク村、その西方800mに位置する7ha程度の遺丘である。



図1 カレ・クブ遺跡の位置と関連する遺跡



図2 カレ・クブ遺跡の全景

当初の目的は、カレ・クブ遺跡を発掘して、イラン東部にザグロスからいつごろ農耕が伝わってきたかを調べることであった。この遺跡では、紀元前 6000 年あるいは紀元前 7000 年ごろのものと思われる非常に古い石器が地表に落ちており、イラン東部へ最初に農耕が拡散してきた頃の古い層が遺跡に残されているものと考え、この遺跡を発掘した。

遺跡中央にトレンチを 2 本設定して地山まで掘り下げた。両方とも 5m ぐらい掘り下げた段階で、遺物が出ない自然の層、地山に達した。そして、この地山の直上（この遺跡で最も古い層から）は、紀元前 5000 年頃のチャシュメ・アリ文化と呼ばれる比較的新しい時代の土器が出土した。つまり、当初狙ったような、紀元前 6000 年あるいは紀元前 7000 年にさかのぼるような古い層を遺跡で確認することはできなかった。つまり、当初の発掘の目的を果たすことはできなかった。しかし、偶然、思いがけない発見があった。

現在の地表面から 1.5m ほど下に厚さ 50 cm ほどの礫層がある。おそらく遺跡の近くの河が氾濫し、運ばれてきた礫が堆積してできた層だと考えられる。そして、この礫層から礫に混じって、カレ・クブ遺跡から 1000km 以上離れた南メソポタミアのウルク文化に典型的な土器群が大量に出土したのだ。では、なぜ、南メソポタミアのウルク文化の土器群が、南メソポタミアから 1000km 以上離れたこの地で発見されたのだろうか？



図 3 カレ・クブ遺跡から出土した南メソポタミアのウルク文化の土器

前 4 千年紀（ウルク期）、南メソポタミア（現在のイラク南部）に世界最古の文明が誕生した。しかし南メソポタミアは、ユーフラテス川とチグリス川が運んだ泥が堆積してできた広大な沖積平野であるため、文明生活を営む上で必要不可欠な資源（銅、錫、金、銀、木材、ラピスラズリ、紅玉髓など）が存在せず、こうした資源を周辺地域（イラン高原や南東トルコ、イラク北部、シリア）から獲得する必要があった。この結果、南メソポタミアの都市国家群が交易ルートを掌握するため競って周辺地域に進出し、交易拠点を形成していった。これによってウルク文化の物質文化は、南メソポタミアを超え、周辺地域に拡散していった。

いままでウルク文化の物質文化が確認された最北東の遺跡は、イラン高原西部のシアルク遺跡などであった。従来、ウルク文化はカビール沙漠を超えることはなかったと考えられてきた。しかし、今回の発見によってカレ・クブ遺跡がウルク文化の物質文化が確認された最北東の遺跡となり、ウルク文化の広がり、カビール沙漠を超え、従来考えられていたよりも 600km も東に広がることになった。

カレ・クブ遺跡には、南メソポタミアの勢力が築いた最果ての交易拠点が合った可能性が高い。カレ・クブ遺跡周辺は、銅鉱石や円筒印章の材料として利用された玉髓を産出する。銅鉱石と玉髓、これが、この地に南メソポタミアの勢力を引き寄せた最大の理由であったと考えている。今後の調査によって、この交易拠点の性格を明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Masashi ABE, Hossein Azizi Kharanaghi	4. 巻 1
2. 論文標題 Preliminary Results of the First Season of Excavations at Kale Kub in South Khorasan, Eastern Iran	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Archaeological Research and Preservation of Cultural Heritage in Iran (Teikyo University)	6. 最初と最後の頁 101-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 安倍雅史、ホセイン・アジジ・ハラナギ	4. 巻 1
2. 論文標題 南ホラーサーン州、カレ・クブ遺跡の発掘調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イラン文明を守る 日本とイランの協力の足跡 (帝京大学)	6. 最初と最後の頁 72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 安倍雅史、ホセイン・アジジ・ハラナギ	4. 巻 26
2. 論文標題 イラン南ホラーサーン州、カレ・クブ遺跡の第1次調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第26回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 62-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Pegah Goodarzi, Mohammad H. Azizi Kharanaghi, Masashi ABE and Arkadiusz Soltysiak	4. 巻 12
2. 論文標題 Human Remains from Kaleh Kub, Iran, 2018	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Bioarchaeology of the Near East	6. 最初と最後の頁 76-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Masashi ABE, Saiji ARAI, Morteza Khanipour
2. 発表標題 Returning to Hunting and Re-Microlithization during the Mushki Phase in Fars, Southern Zagros
3. 学会等名 The 9th International Conference on the PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East (The University of Tokyo) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安倍雅史
2. 発表標題 イラン南ホラーサーン州、カレ・クブ遺跡の第1次発掘調査 イランにおける農耕・牧畜の起源そして文明形成
3. 学会等名 イラン考古学研究会2019（イラン大使館）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安倍雅史、ホセイン・アジジ・ハラナギ
2. 発表標題 イラン南ホラーサーン州、カレ・クブ遺跡の第1次調査 - イラン東部最古の農耕村落を求めて -
3. 学会等名 第26回西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山内和也（監修）、安倍雅史、足立拓朗、四角隆二、村上夏季、山内和也（翻訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Iran National Museum	5. 総ページ数 150
3. 書名 イラン国立博物館コレクションが語るイランの歴史（イラン国立博物館展示カタログ日本語版）	

1. 著者名 The 8.2ka Event and Re-Microlithization during the Late Mlefaatian in the Zagros Mountains: Analysis of the Flaked Stone Artefacts Excavated from Hormangan in North-eastern Fars, South-west Iran	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Masashi ABE, Morteza Khanipour	5. 総ページ数 13
3. 書名 Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----